



写真上:床に:柳井嗣雄「化石樹」 / 長谷川千賀子「土器ダクト」 背後:中村元記録写真



写真上: 床:長谷川千賀子「土器ダクト」 背後:吉田富久一「炭窯図」部分と土器ダクト(煙突)



藝術の根源は農にある

「藝術」の意味が、今日の有機栽培の基礎 となる縄文の農耕に辿られ、創造性の意が 込められる。だが、この語が日本に資本主 義をはじめて導入した明治政府による造語 であるとは皮肉である。

高度に発達した資本主義の経済システム では、貨幣がデジタルに置き換えられて、 尚も利益の追求が続けられる。食糧増産に よって世界人口を増しながら、都市が耕作 地を食い潰す矛盾を孕み、地表は人類史上 希有な過飽和状態に陥っていく。このまま 行くと、かつての古代文明と同様に窒息し、 自滅の途を辿るのかもしれない。

ところが、日本では資本主義の到達点を 過ぎて少子高齢化が進み、100年後の人 口は3分の1に激減が見込まれる。これを 文明・国家の崩落と捉えるか否か。 自滅の 回避には現況を乗り越え、未来に向けた新 しい社会システムの構築が急務となる。こ の機に根本基準を改めては如何だろうか。

我々は藝術を農に帰結させ、創造性に富 んだ生活を回復するために、沃土のつくり 方に注目して循環再生の自然の理に基準を 置く。見失った目的と進路を修正すべきと 考えるからだ。「"野良の藝術"里山の現場」 では、その目的を獲得する手掛かりとして、 メタセコイアに挑んだ。この度はその報告 れたメタセコイアの丸太の山を譲り受け、

年前に生木として中国で発見されて以来、 世界中より注目を浴び、苗木が植樹された。 さいたま市内にも見沼に並木道があり、見 提案が、かたちに現れていることを願う。 沼自然公園、さぎ山記念公園の他、別所沼 や北浦和公園にも植えられている。こと、 野田地区には苗木農家が密集する故、メタ セコイアを取り扱った業者も多くあったが 公園開発が下火になると需要を失くし、苗 木のまま畑に放置された。成長が早いが故 に年輪が粗く、乾燥すると軽いので建築材 には不向きとされ、他に利用価値が期待さ れずに独活の大木と化した。

ファーム・インさぎ山には樵が居り、伐 採した樹木が方々から集められ横たわる。 その一方で農園主からは「農作物に無駄に なるところはない」と名言が発せられ、有 機栽培における循環再生の理が語られる。

我々は使途の定まらない材として伐採さ 農の立場に見習い藝術の創造性に働きかけ 化石樹とされていたメタセコイアは70 ることで、これを将来に向け役に立つ藝術 の復権に期待した。「"野良の藝術" さぎ山 の現場 2017」に参加された各々の作家の

社会芸術/ユニット・ウルス 吉田 富久一



